ISSN 1880-0394

Annual Bulletin Report 2019

東海大学文明研究所所報 2019

巻頭言

「古代エジプトとアンデスの色彩」展示会の開催と本学文化財の活用について

山花 京子
文明研究所員
文化社会学部アジア学科・准教授

本学が所蔵し、文明研究所が管理運営を行っている「アンデス先史文明に関する遺物」（通称アンデス・コレクション）と、「古代エジプト及び中近東コレクション」（略称 AENET）は、いずれも本邦最大級の文化財コレクションである。これらのコレクションについては、2017 年度以降、本研究所のコア・プロジェクト「東海大学所蔵文化財の活用のための基盤整備」で保管・整理、研究、活用が行われてきた。2017 年～ 2018 年度には庫内環境の整備と遺物写真撮影などの基本的な作業が行われた。特に庫内整備活動により、劣化が懸念されていた庫内環境は著しく改善した。そして本年度（2019 年度）は、本プロジェクトの成果を広く一般に周知するために特別企画展「古代エジプトとアンデスの色彩 Colors of Ancient Egypt and Andes」が開催され、東海大学湘南校舎付属図書館展示室（11 号館 1 階）を会場として 2019 年 3 月 11 日～ 7 月 31 日の約半年間、一般に公開された。この企画展は東海大学文明研究所と東海大学付属図書館が主催し、文学部が後援を行ったものである。

本特別企画展の趣旨は、普段陳列展示することができない大学の学内文化財を披露することで、本学が所有する人類の貴重な文化遺産を周知し、同時に文明研究所で行われているこれらの文化財の保存修復および保全活動に対する理解と協力を乞うことにあった。

展示計画は開催の約 1 年前より練り始められ、色彩を軸に旧大陸の代表的な古代エジプト文明と、新大陸のアンデス文明の遺物を同じ展示室に並べる計画が立てられた。そして古代エジプトを担当する山花（文明研究所員）とアンデスを担当する吉田晃章（文明研究所研究員）と大平秀一（文明研究所アドバイザー）が遺物を選定し、それらの遺物のレイアウト順とともに展示会のストーリーを組み立てた。古代世界にはそれぞれの世界で独自の色の解釈があり、古代エジプトにおいては、5 原色とされる赤・黒・白・青（緑）・黄にはそれぞれ彼らの宗教観や世界観につながる意味が付与されていた。一方、アンデスにおいては、多くの色が一度に現れる「多色性」を表現することが山の神の表現につながり、同時に死者の世界をも表象するものであった。これらの文明における色の認識の違いを明らかにするために、古代エジプトの展示においてはケース毎に色分けを行い、アンデスの展示ケース内では山の神や冥界とのつながりを示す多色遺物をテーマ別に展示した。

遺物の展示に関しては、東海大学チャレンジセンター・ユニークプロジェクト古代文明探究会のメンバーが古代エジプトの展示レイアウト及び補足資料としてのレプリカ作りに携わった。同会のメンバーには博物館学芸員課程を履修している学生も多く、実際の展示活動のほぼ全行程を体験することができる貴重な機会であった。

また、図録作成においては、単に展示遺物の解説だけではなく、古代エジプトやアンデスの「色」に対する認識の違いを明らかにするために、山花が「古代エジプトの赤・黒・白・青（緑）・黄」を、そして大平が「「ワロチリ文書」から読み取る先住民の感性・感覚」を寄稿した。そして、吉田がアンデスの地図年表及び「アンデス文明概説」を加え、山花が古代エジプトの地図年表及び「エジプト時代区分と表記について」、「コプトの織物」についての一般概説を加えた。さらに、本学にて行っている文理融合研究の一端を紹介するために「アンデスの土器を科学する」（山花）も盛り込んだ。

実際の展示期間中は、学生や教職員、近隣の住民ら約 1600 人が来場し、配付用図録も増刷を行わなければならないほどであった。また、オープンキャンパス時には上記の古代文明探究会のメンバーが来場した高校生らに解説を行ったり、一般の方々が訪れたカルチャー講座の見学会においては図録執筆者の大平・吉田・山花がギャラリートークを行った。本展示を完遂するには「東海大学所蔵文化財の活用のための基盤整備」プロジェクトのメンバーだけではなく、文明研究所長の山本教授、中央図書館の中嶋館長、平野文学部長をはじめ、様々な方々からの協力が不可欠であった。本展示会で得られた高評価をもとに、今年度内にアンデス・コレクションの遺物リストが掲載された HP を立ち上げる予定である。

本学の文化財コレクションの大きな 2 本柱となる古代エジプトとアンデスのコレクションを学内外で活用するために、たゆむことなく保全活動を行い、活動の幅を広げ、新たな展示活動の機会も模索して行きたいと考えている。

文明研究所の研究プログラム

文明研究所は、本学の創設者松前重義博士の意思を受け継ぎ、学内の幅広い分野からの研究者を結集して、過去の文明、現代文明が抱える問題、これからの文明のあり方について総合的に研究する機関です。

当研究所の発足は 1959 年に遡りますが、2001 年の新文明研究所の設立後は、「21 世紀文明の創出」という研究テーマのもと、2013 年度まで、おおよそ 3 年を 1 期とする研究プロジェクトを策定し、研究を推進してきました。第 1 期（2001 年度～ 2004 年度）は「現代文明の展開と社会文化的多様性」、第 2 期 (2005 年度～ 2007 年度) は「グローバリゼーションと生活世界の変容に関する総合的研究」、第 3 期 (2008 年度～ 2010 年度) は「対話と共生を理念とする新しい社会の構築」、第 4 期（2011 年度～ 2013 年度）は「創造すべき 21 世紀文明」でした。2014 年度からは、本学の第Ⅱ期の中期目標（2014 年度～ 2018 年度）を受けて、「文明とグローバリゼーション」をテーマとして掲げて、共同研究を進めました。

2016 年 4 月の総合社会科学研究所の設置に伴って、本研究所の研究活動は人文学を中心に進めていくことになり、人文学の活性化と、本学が所蔵する文明遺産の整備・研究・活用とを、2 つの柱として、共同研究をすすめています。前者では、この間、「超領域人文学（Trans-Disciplinary Humanities）構築に向けた基礎研究」と「20 世紀人文学の方法論的再検討」の 2 つのコア・プロジェクトを実施してきましたが、2019 年度は両者を統合して、コア・プロジェクト「人文学の方法論に関する総合的研究」として研究活動を推進しています。後者では、コア・プロジェクト「東海大学所蔵文化財の活用のための基盤整備」において、本学が所蔵する「アンデス先史文明に関する遺物」（アンデス・コレクション）と「古代エジプト及び中近東コレクション」（AENET）の保管・整理を行うとともに、本学のマイクロ・ナノ研究開発センター等との連携による文理融合型の研究や、展示会の開催などを行っています。また、学部を超えた共同研究である「森里川海研究プロジェクト」（2017・2018 年度）、「戦後大衆文化に関する基礎的研究―緒形拳関係資料の整理をめぐって―」(2017 ～ 2019 年度)、「人間営為と環境の関係性―人文学・社会学の視点から」(2019 年度) についても、本研究所の課題として展開しています。

また 2019 年度の特記すべき事項としては、東海大学付属図書館展示室（11 号館 1 階）で、2019 年 3 月 11 日から 7 月 31 日まで「古代エジプトとアンデスの色彩」を、10 月 14 日から 11 月 29 日まで「軌跡―名優緒形拳とその時代―」を、12 月 18 日から 2020 年 3 月 19 日まで「レオナルド・ダ・ヴィンチ没後 500 年記念　つながり合う知と美―甦るレオナルド・ダ・ヴィンチの手稿―」を連続して開催し、各研究プロジェクトの研究成果を社会的に発信したことがあげられます。

2019 年度の研究プロジェクト

「人文学の方法論に関する総合的研究」（コア・プロジェクト 1）

本研究所の柱の一つである人文学の活性化について、2018 年度までは、「超領域人文学（Trans-Disciplinary Humanities）構築に向けた基礎研究」と「20 世紀人文学の方法論的再検討」の 2 つのコア・プロジェクトにより推進してきた。2019 年度は、従来の研究活動を継続するとともに、「人文学の方法論に関する総合的研究」として統合して、両者の研究交流をはかることとした。

「超領域人文学（Trans-Disciplinary Humanities）構築に向けた基礎研究」班

平野葉一・田中彰吾・中川久嗣
吉田欣吾・服部泰・鷹取勇希
沓澤宣賢・中村朋子・渡邊青

現代は、一方ではグローバル化が展開し、他方では多様性尊重が叫ばれるという時代である。このような一見すると相反する主張が交錯するなかで、人間の価値意識を検討する重要性はますます高まっていると感じられる。人間営為と文明社会の意味や在り方に関しては、これまでも思想・哲学を基礎として検討が進められてきた。しかし、現代文明にあっては、科学技術が価値の基盤となって人間や社会を左右しかねない傾向が見られる。こうした状況に鑑み、本プロジェクトでは従来の人文学の枠組みを超えた知の体系として、複合的視点から人間営為と文明社会の在り方を考える学問としての超領域人文学の構築について検討してきた。また、この問題は本学の大学院文学研究科文明研究専攻の教育・研究にも関わる関わるという点から、本プロジェクトでは大学院同専攻との連携をはかって進めてきた。

2019 年度においては、以下の 3 点を柱にして研究を進めた。

（1）国際シンポジウム “Dialogue between Civilizations”

本プロジェクトでは、大学院文学研究科文明研究専攻とのジョイントで 2015 年度から国際シンポジウムを開催している。今年度は 2018 年度開催（2019 年 3 月）の第 4 回国際シンポジウムの論文を中心に欧文誌 “Civilizations”（『文明』）No.24（Special Issue）を発行した。

また、2020 年 3 月 7 日（高輪校舎）に第 5 回国際シンポジウムとして、デンマーク・オーフス大学、アメリカ・ハワイ大学から講演者を招いて言語多様性と QOL のテーマで開催することを企画していたが、諸般の事情により延期せざるを得ない状況となった。これは 2020 年 5 月あるいは 6 月に形を変更して開催の予定である。

（2）学内における研究会

超領域人文学の構築に向けた事例研究として当該の大学院生や大学院出身者との研究会を春セメスターに 2 回、秋セメスターに 1 回開催した。これらの研究成果は、『文明』、『文明研究』などに論文、研究ノートとして報告されている。

（3）個別研究との連携による環境 QOL 研究

本プロジェクトの一環として環境 QOL の問題があり、個別プロジェクト②（責任者：中嶋卓雄）との連携で研究を進めた。とくに、個人や個人が属する集団の QOL に関して、人間の心身の問題、アイデンティティの問題などをテーマに研究し、研究発表を行った。

「20 世紀人文学の方法論的再検討」班

山本和重・田尻祐一郎・村田憲郎・馬場弘臣
川﨑亜紀子・篠原聰・斉藤仁一朗

本プロジェクトは、人文学に対する社会的評価が低下するなかで、その活性化のために、20 世紀人文学の方法論を歴史的な視点からふりかえり、21 世紀に継承すべき方法をさぐることを目的としている。その問題関心の背景にあるのは、19 世紀的な工業化型近代化や技術万能主義に照応した科学主義的人文学に対して、20 世紀には、哲学、歴史学、民俗学、教育学など、さまざまな領域から反省と新たな方法論が提示されてきたが、それらの成果が必ずしも今日の人文学に継承されておらず、そのことが人文学における方向性の喪失状況、ひいては人文学に対する社会的評価の低下とつながっているのではないかという認識である。こうした認識の可否を含めて、学問領域を超えた共同討議によって、人文学の可能性を探ろうとするもので、2016 年度から 2018 年度までの計 8 回の研究会の議論のなかで、身体性（感性）という問題が 20 世紀人文学の大きな特徴（論点）として浮かび上がり、今年度はそれを受けて、下記の

２回の研究会を開催した。

第９回（2019 年 8 月 21 日）：津上英輔氏（成城大学教授）「感性的判断の構造と危険」

第 10 回（2019 年 11 月 29 日）：斉藤仁一朗氏（課程資格教育センター）「『ワークショップによる学び』と身体性―それは方法論か、身体論か―」

これまでの研究会活動のまとめとして、2020 年 3 月 6 日に、高輪キャンパスで、「人文学における身体性をめぐって」というテーマのシンポジウムの開催を企画した。そこでは 20 世紀において各学問分野で、感性や身体性がどのように扱われてきたかをふりかえるとともに、21 世紀の現代社会において、学問研究の領域のみならず、教育などの実践的領域における身体性をめぐる動向及びその問題点について議論する予定であったが、新型コロナウイルスの感染拡大により、開催を断念した。次年度の開催を期したい。

「東海大学所蔵文化財の活用のための基盤整備」（コア・プロジェクト２）

山花京子・吉田晃章・篠原聰・田口かおり

本プロジェクトでは 11 号館に収蔵されている古代エジプト及び中近東コレクション（AENET）（以下、エジプト・コレクションとする）と 5 号館 1 階に収蔵されているアンデス・コレクションの活用に関わる環境整備と保全を目的としている。本プロジェクトに関して、本年度は執筆活動 7 件、国際学会発表 1 回、国内学会発表 10 回を行った。

以下では、まず 2019 年 3 月 12 日～ 7 月 31 日に 11 号館図書館展示室で行われた文明研究所主催『古代エジプトとアンデスの色彩』展覧会について記した後、１）. アンデス・コレクションと２）. エジプト・コレクションについてそれぞれの進捗状況を記す。

『古代エジプトとアンデスの色彩』展覧会

2019 年 3 月 12 日～ 7 月 31 日の約半年間、11 号館図書館の展示室にて開催した。

本展示会は、文明研究所、付属図書館、そして文学部の主催及び後援により、普段は陳列展示することができない貴重な学内文化財を披露することで、本学が誇る貴重な人類の文化遺産を見知ってもらい、また、本学における文化財保護修復保全活動の一端を理解願うために企画された特別展示会である。

展示期間中は本学学生、近隣の住民、県外などの遠方から約 1,600 人が見学に訪れた。また、6 月 21 日望星ゼミナール講座第 3 回目に於いて、受講者 18 名が展覧会を見学し、図録執筆者である大平教授、吉田准教授、山花が展示解説を担当した。さらに、6 月 16 日･7 月 21 日のオープンキャンパス時には、チャレンジセンター・ユニークプロジェクト古代文明探究会の学生と山花が展示室にてギャラリートークを行った。

１）. アンデス・コレクション

＊ 2018 年度 3 月末にアンデス土器の中性紙保存箱への入れ替え作業が完了し、箱に番号とラベルを貼る作業を行った。

＊ 2018 年より継続しているアンデス土器の X 線 CT による解析は、2019 年度も引き続きマイクロ・ナノ研究開発センターにあるイメージング研究センターとの共同研究を行っている。

＊ 8 月 2 日「文化財を科学する―アンデス土器の構造解析に関する研究会―」を東海大学文明研究所主催、マイクロ･ナノ研究開発センター共催で開催した。
https://www.u-tokai.ac.jp/about/campus/shonan/news/detail/post_1489.html

＊ 9 月に旧蔵先より引き継いだ紙台帳と現在使用している電子台帳の名称照合作業を行った。

＊ 11 月 26 日に第 24 回古代アメリカ学会が開催され、「古代アンデスの笛吹きボトルのデザインと製作技術の研究―クピスニケ、ワリ、チャンカイの資料を踏まえて―」（発表者　真世土マウ、鶴見英成、森下矢須之、山花京子）のポスター発表を行った。この研究発表のために東海大学文明研究所のアンデス・コレクションの 3 点の土器について資料（X 線 CT 画像、遺物写真）提供を行った。

＊ 2020 年 3 月 28 日～ 7 月 26 日（予定）で東京大学総合研究博物館小石川分館にて「ボトルビルダーズ―古代アンデス、壺中のラビリンス」展示会を開催する。本展示会には本学アンデス・コレクションからも 4 点の土器を出陳し、さらにこれら 4 点の土器の復元のために X 線 CT スキャンデータも提供した。東京大学と東海大学文明研究所・イメージング研究センターとの共催行事となる。

＊ 2020 年 3 月よりアンデス・コレクション HP の運用を始める。サーバーは東海大学総合情報センターに置き、HP 構築と管理は東海教育研究所が行う。

2）．エジプト・コレクション

＊5月10日に米国ユタ州ブリガム・ヤング大学のハル教授とブルメル准教授が来学。図書館の貴重資料とともにAENET資料（パピルス）を閲覧した。

＊11月よりマイクロ・ナノ研究開発センターにあるイメージング研究センターにて古代エジプトの土器と石製容器、ファイアンスについてのX線CT解析にも着手し、現在も継続している。

＊松前記念館にて「イスラムのガラス腕輪」のミニ展示を行った。

＊続く2020年1月29日から同松前記念館にて「古代エジプトの化粧」ミニ展示を行っている（少なくとも半年は継続展示の予定）。

＊12月2日に大英博物館保存修復部門のディエゴ・ティリーニ氏（テキスタイルの染色専門）がAENETコレクションを見学。

＊JR九州（九州旅客鉄道株式会社）の機関誌『PLEASE』11月号「ガラス玉の歴史」にAENETコレクションの写真を2枚提供した。

＊11月12日　駐日エジプト全権大使アイマン・アリ・カーメル閣下が来学され、AENETコレクションを視察。東海大学ニュース https://www.u-tokai.ac.jp/academics/undergraduate/cultural_and_social_studies/news/detail/post_66.html

＊11月26日放送　BSプレミアム「アナザーストーリーズ」の『運命の分岐点　「巨大遺跡“引っ越し”大作戦～エジプト　アブ・シンベル神殿～」』の取材協力を行い、写真を提供した。https://www.nhk-ondemand.jp/goods/G2019096951SA000/index.html?capid=nol_4_P3444

「戦後大衆文化の基礎的研究
―緒形拳氏関係資料の整理をめぐって―」
（個別プロジェクト①）

馬場弘臣・紅谷龍司・兼平賢治・神谷大介

本プロジェクトは、今年度が3年目の最終年度にあたっている。まずは昨年度までと同様、緒形拳氏邸における資料の調査と整理作業を進めた。緒形邸の資料調査は3回実施し、今年度も臨時職員の岡崎佑也氏を中心に資料の整理作業を行った。今年度はとくに、緒形氏の舞台、映画、テレビにおける全作品目録の完成と、蔵書の目録作成、そしてスクラップブックのまとめ作業を中心とした。スクラップブックについては、「活動報告」を参照していただきたい。

最終年度にあたって、2つの研究成果をあげておきたい。1つは、付属図書館展示室(11号館1階)において、2019年10月14日（月）から11月29日（金）までの期間、企画展「軌跡―名優緒形拳とその時代―」を開催したことである。これは、1958年から2008年までの50年間にわたる緒形氏の俳優活動を舞台、映画、テレビの3部門に分け、その時代背景を意識しながらそれぞれの代表作を紹介し、俳優人生の概略をつかもうとしたものであった。期間中には内外から1,500名を超える来場者があった。また、展覧会の開催にあたっては、大学院文学研究科修士課程2年の浦安衣香氏を中心に、「緒形拳研究会」学生部会に所属する学部生8名が、企画の段階から参加して準備作業にあたった。なお、2020年には、10月3日（土）から12月6日（日）の日程で、横浜市歴史博物館において企画展「俳優緒形拳とその時代―戦後大衆文化史の軌跡（仮題）」を開催する予定となっている。

2つ目は、緒形氏の全出演作品目録を『文明』No.25に「プロジェクト報告書」として掲載したことである。目録の作成と修正は主に岡崎氏が担当した。本目録も舞台、映画、テレビドラマの3部門に分けて記述した。その結果として、舞台が267件、映画が70件、テレビドラマが211件となった。

プロジェクトは最終年度となったが，まだ整理が終了したわけではない。俳優関係の写真資料をはじめ、ポスター、緒形氏のエッセイ、書画、緒形氏宛の書簡・ハガキ、蔵書などの整理が必要である。したがって、資料目録の作成もいまだ完成にはいたっていない。また、前述したように、2020年度には横浜市歴史博物館での展覧会も予定している。継続的な研究と作業が求められるところである。

「人間営為と環境の関係性
―人文学・社会学の視点から」
（個別プロジェクト②）

中嶋卓雄・平野葉一・李昭知

本プロジェクトは、環境省の「森里川海研究」の主題を中心に、人間営為と環境保持の双方の視点から文明社会の在り方を検討するものである。ここでは、人間の満足度を地球規模での自然環境保持を指標として検討する上で「環境QOL」なる概念を導入し、人間と自然の共存の方向性を探る試みを続けている。

2019 年度は熊本校舎の総研プロジェクト「環境 QOL 研究」と連携して研究会を開催し、夏に熊本校舎にて合同研究集会を開催した。

また、2018 年度から国際会議 ICICIC において「環境と QOL」のセッションを設置しているが、今年度は韓国での国際会議にて研究報告を行った（中嶋、平野、李、他）が、これには「超領域人文学の構築」研究との連携による 2 名の大学院生（博士課程前期・後期各 1 名）も含まれる。とくに、研究成果としては、ヨーロッパ（とくにデンマーク）における QOL 概念が人々の環境への意識と強く関連すること、今日の環境問題の根本的な課題は既に 18 世紀産業革命期やその後の 19 世紀にも見出され、とくに 19 世紀の科学技術の進展とそれに呼応する近代国民国家形成などについて検討する方向性が明示された。

『文明』第 25 号（2020 年 3 月発刊）
内容のご紹介

巻頭言

- 災害史研究は今に何を伝えるか？
（馬場弘臣）

論文

- 本学文明研究所蔵アンデス・コレクションのガラス玉
（山花京子）

研究ノート

- 環境 QOL に関する人文学からの検討
（平野葉一，吉田欣吾，中嶋卓雄，平木隆之，安達未菜）

資料目録

- 俳優「緒形拳」出演作品目録
（馬場弘臣，岡崎佑也）

活動報告

学部教育等との連携

「教材としての文化財利用」

山花 京子

＊ 2019 年度はエジプト・コレクションを中心に活動をしているチャレンジセンター・ユニークプロジェクト古代文明探究会のメンバーを対象に 4 回、遺物見学会を開催した。

＊「古代エジプトとアンデスの色彩」の展示準備には、上記の古代文明探究会のメンバーが多く携わった。彼らは解説パネルの原案の作成、説明用レプリカの作成など、展示ディスプレイに関して自発的に勉強会を持ち、準備を行った。

「古代エジプトとアンデスの色彩」展覧会のディスプレイを担当したチャレンジセンター・ユニークプロジェクト古代文明探究会のメンバー

＊文学部歴史学科考古学専攻にて開講している「外国考古学地域研究講義 C」と、文化社会学部アジア学科で開講している「文物に学ぶアジア」では、古代エジプト・コレクションを学生たちが実際に手に取って観察をする、ハンズオン方式の授業を行っている。履修学生たちは素材の違う遺物に触れ、細部を観察し、これらの遺物が作られた歴史的・文化的背景について考察を深めた。また、実際の文化財に触れて取り扱いを学ぶことで、古来受け継がれてきた文物を大切にすることを学んだ。

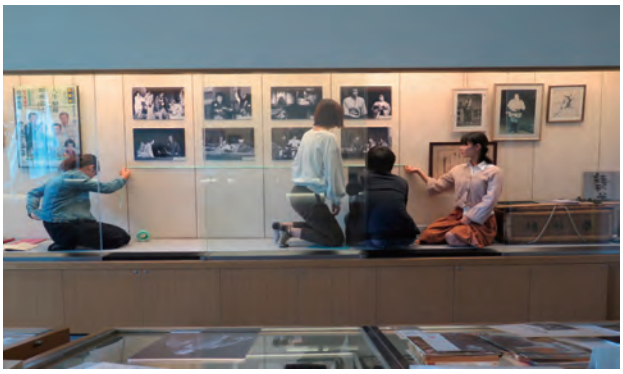
＊プロジェクトメンバーの吉田も、「アンデス地域の諸文明」授業の中で、アンデス・コレクションの実物を学生とともに観察する機会を持った。

学部教育等との連携

「展示会の開催と史料管理学演習」

馬場 弘臣

2018 年 7 月に設立した「緒形拳研究会」には、学生部会会員として大学院生 1 名と学部生 8 名（男子 3 名・女子 6 名）が参加している。学生部会会員は、資料整理と展覧会の準備作業を行った。資料整理は主に蔵書目録の作成に従事してもらった。展覧会は、付属図書館展示室 (11 号館 1 階) において、2019 年 10 月 14 日（月）から 11 月 29 日（金）の間、「軌跡―名優緒形拳とその時代―」と題して開催されたものである。展覧会を開催するにあたって学生部会会員たちは、企画会議の段階から参加し、パネルの製作や展示作業、片付けなど、一連の作業を中心となって進めた。なお、学生部会の学部生は全員 3 年生で、2018 年度の史料管理学演習を履修した学生たちであった。



展覧会の準備

そこで今年度もまた、昨年度に引き続き、「戦後大衆文化の基礎的研究―緒形拳氏関係資料の整理をめぐって―」と、文学部歴史学科日本史専攻開講のウィンターセッション科目「史料管理学演習」のタイアップ授業を行った。本年度の履修生は、2 年生 11 名（男子 5 名・女子 6 名）であった。授業では 6 名ずつ A と B の 2 つのチームに分け、それぞれのチームは 2 人でひと組とした。 1 名足りない分は、大学院生に手伝いをお願いした。

A チームは、これまでバラバラにファイリングしていた台本を舞台、映画、テレビドラマの 3 部門に分け、それぞれ年代順に並び替える作業を行った。並び替えた台本は、数点ずつファイリングし、ファイルの背表紙には順番にラベルシールを貼った。台本の総数は 284 冊であるが、これをファイルに収納すると、舞台関係の台本ファイルが 14 冊、映画が 10 冊、テレビドラマが 19 冊となった。

B チームは、緒形氏のスクラップブックの整理作業を行った。緒形氏は、自分の俳優活動に関するスクラップブックの作成を業者に依頼していた。そのためこれらのスクラップブックには、全国の新聞や雑誌などからの切り抜きが集約されており、緒形氏の俳優人生はもちろんのこと、当時の芸能情報や社会、世相を知るための貴重な資料群となっている。これらの切り抜きには、記事の掲載年月日と出典を明記した上で台紙に貼られ、最終的に特製のスクラップブックに綴じられている。ところが、台紙に貼り付けたままでファイルされていなかったり、切り抜きの状態だけのものも大量にあった。そのため A チームの作業が終了した段階で B チームと合流し、全員でスクラップブックの整理作業にあたった。その結果、特製スクラップブックに綴じられたものが 92 冊、その他のスクラップブックに綴じられたものが 20 冊あった。この合計 112 冊については、台本整理と同様、ラベルシールを背表紙に貼った。また、バラバラの切り抜きはポリプロピレンの袋に入れた上で、ダブルフラップフォルダーに入れるようにした。これらと台紙に貼り付けられただけのスクラップについては、年月日順に並べて変えて市販のファイルに綴じていった。このファイル数が 76 冊となった。こうして全 188 冊のスクラップブックの整理作業を終えることができた。

史料管理学演習の様子

また、今年も 4 日目に緒形拳氏の長男の幹太氏をはじめ御家族や関係者の方 5 名が来校され、写真資料の整理を手伝っていただいた。プロジェクトの報告でも述べたが、すべての資料を整理するにはまだまだ時間がかかるので、来年度の史料管理学演習における実習はもちろんのこと、「緒形拳研究会」が中心となって、今後も学生たちを巻き込んだ活動を続けていきたい。

所員の活動

山本　和重
文明研究所長、文学部歴史学科日本史専攻・教授

【執筆】
- 「新たな道史に望む　史料の蒐集と、北海道の独自性・特殊性へのまなざしと」「北海道史への扉」第1号，2020年3月25日WEB配信開始
- 「記録　学部研究費による研究活動の報告―相武地域史研究会について―」『東海大学紀要　文学部』第110輯，2020年3月

【報告・講演】
- 「戦時下の協調会―「社会政策研究会記録」を中心に―」大原社会問題研究所月例研究会（2019年7月24日）。報告要旨は『大原社会問題研究所雑誌』733号（2019年11月）に掲載。

【その他の活動】
- 「アジア太平洋戦争期の相武地域史研究会」(2019年6月20日発足)の開催(2019年6月20日, 8月28日, 11月28日, 2020年1月29日)

平野　葉一
文学部文明学科・教授

【執筆】
- Yoichi Hirano，“An aspect of the historical development of the concept of the golden ratio - concerning the divine proportion in the Renaissance period –“，Civilizations，No.24(Special Issue)，2019，pp.50-61.
- Takuo Nakashima, Yoichi Hirano，“Nature Oriented Metrics of Wellbeing Based on Environment-Related QOL”，Civilizations，No.24(Special Issue)，2019，pp.18-24.
- Mina Adachi, Yoichi Hirano，“The Modernity of Felibrige Movement in the 19th Century - from a viewpoint of Language and Culture in Human Society”，ICIC Express Letters，Part B:Applications，An International Journal of Research and Surveys，Vol.11, No.2，February 2020，pp.181-187.
- 平野葉一、吉田欣吾、中嶋卓雄、平木隆之、安達未菜、「環境QOLに関する人文学からの検討」『文明』No.25，2019，pp.15-27.

【報告】
- Y. Hirano, T. Nakashima, T. Kamiyama, T. Hattori, M. Fujioka, Y. Takatori, S. Watanabe, T. Nakamura, M. Adachi, “Reflection on Anthropocene - Introduction of Trans-Disciplinary Humanities for the Incarnation of the Notion of eQOL(environment-related-QOL)”, ICICIC 2019 (14th International Conference on Innovative Computing, information and Control)，Seoul，August 2019.
- 平野葉一、中嶋卓雄、高橋将徳、「Research on eQOL (environment-related QOL)―環境QOL研究」（ポスター発表），東海大学2019年度研究交流会，2019年11月
- 平野葉一、平木隆之、服部泰「環境QOL (eQOL) に関する超領域人文学からの事例研究」（ポスター発表），東海大学2019年度研究交流会，2019年11月

【その他の活動】
- 東海大学付属図書館第69回展示会「レオナルド・ダ・ヴィンチ没後500年記念　つながり合う知と美―甦るレオナルド・ダ・ヴィンチの手稿―」，東海大学付属図書館，2019年12月18日～2020年3月19日

田中　彰吾
現代教養センター・教授

【執筆】
- “Reconnecting the self to the divine: The role of the lived body in spontaneous religious experiences” in O. Louchakova-Schwartz (Ed.). The problem of religious experience (pp. 27-37). Cham, Switzerland: Springer Nature，2020年1月
- 「心身脳問題―からだを巡る冒険」『心理学研究』第90巻5号，2019年12月（共著：田中彰吾・浅井智久・金山範明・今泉修・弘光健太郎）
- “Bodily origin of self-reflection and its socially extended aspects” in W. J. Silva-Filho & L. Tateo (Eds.). Thinking about onself: The place and value of reflection in philosophy and psychology (pp. 141-156). Cham, Switzerland: Springer Nature，2019年6月
- 「対話する身体―生きた経験」『臨床心理学』第19巻5号，2019年5月

【報告・講演】（主なもの）
- 「Intercorporeality and Aida: An alternative view of social understanding」International Society for East Asian Philosophy 2019・シンポジウム「Proposing New Pespective on “Intercorporeality” from East-Asian Philosophical Viewpoint」にて報告（明治大学），2019年12月
- 「ポスト身体性認知としてのプロジェクション概念」プロジェクション・フォーラム・第９回定例研究会にて講演（青山学院大学），

2019 年 11 月
- 「On the normativity that emerges through embodied social interactions」チェコ科学アカデミー主催「Workshop on Embodiment, social interaction and normativity」にて講演（Czech Academy of Sciences, Czech Republic），2019 年 10 月
- 「現象学的認知科学の可能性」, 日本心理学会第 83 回大会・大会順位委員会企画シンポジウム「心理学と現象学―その関係の過去・現在・未来」にて報告（立命館大学），2019 年 9 月
- 「身体性哲学からみる e スポーツ」，日本体育学会第 70 回大会・公開シンポジウム「テクノロジーの進化と体育・健康・スポーツ科学―e スポーツを題材に」にて報告（慶應大学），2019 年 9 月
- 「ふり遊びとプロジェクション」, 日本認知科学会第 36 回大会・オープンセッション「プロジェクションの理論とモデルへ向けて」にて研究発表（静岡大学），2019 年 9 月
- 「Motor learning and body schema/image distinction」科研費「トランスカルチャー状況下における顔身体学の構築」企画ワークショップ「Radical Embodied Cognition」にて講演（立教大学），2019 年 8 月
- 「Body image as a product of interactions between the self and the other」，38th International Human Science Research Conference, 公募シンポジウム「Social Dimension of the Body Image」にて報告（Molde University College, Norway），2019 年 6 月

【その他の活動】（主なもの）
- 心の科学の基礎論研究会 (第 85 回) ＆エンボディードアプローチ研究会 (第 8 回)・合同研究会の企画および司会（明治大学），2019 年 7 月
- 立正大学哲学会・2019 年度春夏大会、武内大氏の講演「星の魔術―現象学的元型論の展開」にて指定討論（立正大学），2019 年 7 月
- International Human Science Research Conference の 2021 年東京大会に向けて、大会運営委員会を組織（東海大学），2019 年 6 月～

馬場　弘臣
教育開発研究センター・教授

【執筆】
- 巻頭言「災害史研究は今に何を伝えるか？」東海大学文明研究所『文明』No.25，p.1 ～ p.2，2020 年 3 月
- 個別研究プロジェクト報告「緒形拳出演作品目録―映画・テレビドラマ・舞台―」東海大学文明研究所『文明』No.25，2020 年 3 月

【学会・研究会発表】
- 関東近世史研究会シンポジウム「近世災害史を考える」の報告 3 本のコメンテーター（國學院大學），2019 年 9 月 29 日

【講演・市民講座】
- 「小田原藩の藩政改革―中興の租　大久保忠真」（小田原市民交流センター［UMECO］），2019 年 6 月 1 日
- 「箱根戦争とは何だったのか？―幕府遊撃隊と小田原藩の苦悩―」（箱根町立郷土資料館），2019 年 6 月 2 日
- 「江戸時代の荻野と荻野山中陣屋焼き討ち事件」（厚木市立荻野中学校），2019 年 8 月 22 日
- 「江戸時代の東海道を通った外国人―朝鮮通信使を中心に―」（藤沢市藤澤浮世絵館），2019 年 9 月 21 日
- 古文書講座「天狗党の追討と小田原藩―「吉岡由緒書」を読む―」（横浜青少年交流・活動支援スパース），2019 年 10 月 20 日
- 古文書講座応用編「戊辰箱根戦争―小田原藩 vs. 遊撃隊―」（神奈川県立公文書館），2019 年 11 月 10 日

【その他の活動】
- 企画展覧会「軌跡―名優緒形拳とその時代―」（湘南キャンパス 11 号館付属図書館），2019 年 10 月 14 日～ 11 月 29 日
- 講演録「小田原藩の藩政改革―中興の租　大久保忠真」『小田原史談』第 260 号，p.1 ～ p.11

山花　京子
文化社会学部アジア学科・准教授

【執筆・翻訳】
- 「本学文明研究所蔵アンデス・コレクションのガラス玉」『文明』No.25，2020 年 3 月
- 「古代エジプト　ビーズでつながる社会」，池谷編 『ビーズでたどるホモサピエンス史』，第 8 章，国立民族学博物館（近日刊行予定），2020 年 3 月
- 横山知則、山花京子、秋山泰伸 「古代エジプトの硫黄製ビーズに関する研究」『文化財修復保存学会誌』vol. 62，pp.28-42，2019 年 5 月
- 「古代エジプトの青く光輝くもの―ファイアンスの魅力―」『ORIENTE』vol. 59，pp. 12-15，古代オリエント博物館, 2019 年 7 月
- Kyoko Yamahana & Tsubasa Sakamoto, “Nubian Materials in the Collection of Tokai University, Japan,” Sudan & Nubia,　Sudan Archaeological Research Society，vol. 23，pp. 169-171，2019 年 11 月
- 「セクメト神立像」Statue of Goddess Sekhmet,「彩色木棺」Painted Wooden Coffin Fragment, 日本語及び英語解説　項目執筆『アーティゾン美術館　200 ハイライト　石橋財団コレクション』公益財団法人石橋財団 アーティゾン美術館，pp.16-17，2019 年 11 月
- 「パピルスの保存と修復」『金大資料館コレクション展 2019「保存と修復　第 2 章」』, 金沢大学資料館

【報告・講演】
- Kyoko Yamahana, “The first papyrus restoration project in Japan: Educating students to become papyrus conservators,” in ICOM International Committee for Egyptology, Egyptological Research in Museums and Beyond，2019 年 10 月
- 山花京子・秋山泰伸「第 435 回望星講座「エジプト文明　謎の物質ファイアンスの復元に挑む」，望星学塾，2019 年 4 月 13 日
- 「古代エジプトの青く『光り輝くもの』―ファイアンスの魅力」，古代オリエント博物館　特別講座，2019 年 4 月 26 日
- 「古代エジプト文明シリーズ①　パピルスを手作りしよう」，望星学塾望星ゼミナール，2019 年 5 月 31 日
- 「古代の物質「ファイアンス」で小物づくり」、公益財団法人七尾美術財団　能登島ガラス美術館　特別講座，2019 年 6 月 1 日
- 「古代エジプト文明シリーズ②　古代エジプトの書記体験」，望星学塾望星ゼミナール，2019 年 6 月 7 日
- 「古代エジプト文明シリーズ③「古代エジプトとアンデスの色彩」」，望星学塾望星ゼミナール，2019 年 6 月 21 日
- 「クレオパトラのエジプト―アレクサンドロス大王からプトレマイオス朝終焉まで―」，東海大学地域連携センター生涯学習講座，2020 年 1 月 14 日
- 「新大陸のシェブロン玉―東海大学文明研究所蔵　アンデス・コレクション内のガラス玉―」，日本ガラス工芸学会　2019 年度大会，ポスター発表
- 「文明研究所蔵のアンデス土製楽器の X 線 CT スキャンニング―古代の音色を再現　3 D レプリカを演奏する―」，東海大学産学連携フェア 2019，ポスター発表
- 松前ひろみ・山花京子他「考古学コレクションと生物学情報を統合した東海大学デジタル博物館の基盤構築」，東海大学産学連携フェア 2019、ポスター発表
- 「文化財を科学する―アンデス土器の構造解析に関する研究会―発足から現在までの研究経過と成果概要」，東海大学文明研究所・マイクロ・ナノ研究開発センター主催　文化財を科学する―アンデス土器の構造解析に関する研究会―，口頭発表
- 「古代エジプト・ファイアンスの製作技法に関する研究」，第 47 回古代エジプト研究会、口頭発表
- 山花京子他「東海大学文明研究所蔵アンデス・コレクションの土製楽器の X 線 CT スキャンから広がる研究―学内文化財の修復保存活動から研究へ―」，文化財修復保存学会　第 41 回大会，口頭発表
- 佐藤穂波・宮沢靖幸・山花京子「文化財の修復を目標とした古代の金属材料ろう付け加工技術の再現と冶金的解析」，文化財保存修復学会　第 41 回大会、ポスター発表
- 坂本翼・山花京子「東海大学所蔵のヌビア・コレクション」、日本西アジア考古学会　第 24 回大会，ポスター発表

【その他の活動】
- 山花京子他「３D プリンタで再現した古代アンデスの楽器の演奏実験を行った」東海大学新聞掲載，2019 年 5 月 27 日 https://www.u-tokai.ac.jp/academics/undergraduate/letters/news/detail/d.html
- NHK-BS プレミアム「陶王子　器の来た道」、2019 年 4 月 30 日放送，出演・制作協力
- NHK-BS「アナザーストーリーズ　巨大遺跡　引越し大作戦　エジプト　アブ・シンベル大神殿」，2019 年 11 月 26 日放送，出演・制作協力
- ブリヂストン美術館館報 67「藤島武二と仏教―真珠と海」執筆のための研究協力，2019 年 4 月 1 日
- JR 九州　九州旅客鉄道株式会社　旅のライブ情報誌　PLEASE　11 月号 「九州ものしり学　ガラス玉の歴史」 資料提供

篠原　聰
課程資格教育センター・准教授

【執筆】
- 書評「新関公子『歌麿の生涯―写楽を秘めて」反骨･先進絵師としての実像」（『美術運動史』174 号、美術運動史研究会、2019 年 8 月）pp.8-12
- 書評「津上英輔『危険な「美学」』美学は社会の役に立つ」（『美術運動史』177 号、美術運動史研究会、2020 年 2 月）pp.14-16

【報告・講演】
- 市民講座「美人画の美術史」（鎌倉市鏑木清方記念美術館）2019 年 4 月 15 日
- 研究発表「『浮世絵画派』の躍進　鏑木清方の新浮世絵と大正期の文展（日本画）・南画・版画」（第 70 回美学会全国大会口頭発表）2019 年 10 月 12 日
- 報告「『彫刻のある街』をめざして　大学による地域連携プログラムの新展開」（ユニバーサル・ミュージアム研究会）2019 年 7 月
- 報告「藤沢市の彫刻保存活動について」（屋外彫刻調査保存研究会）2019 年 7 月
- シンポジウム「セッション Ⅰ　彫刻を超克する―制作と鑑賞の新たな地平」（「日本におけるユニバーサル・ミュージアムの現状と課題」国立民族学博物館）2019 年 11 月

【その他の活動】
- 企画展「松前重義とオリンピズム」展（松前記念館、2018-19 年度企画展）リーフレット
- 企画展『西田青坡展』（西田青坡展実行委員会，2019 年 7 月）リーフレット
- シンポジウム『持続可能な彫刻　アートが拓くユニバーサルな可能性』公開シンポジウム報告書 2020 年 3 月

東海大学文明研究所所報 2019
発行人　山本和重
発行日　2020 年 3 月 31 日
発行所　東海大学文明研究所
神奈川県平塚市北金目 4-1-1　〒 259-1292　tel.0463-58-1211　ext.4900 ～ 4902　fax.0463-50-2050